

## 島根県における裂織・紙布・藤布の分布（一）

松尾 優平

前稿の「山口県内における裂織・紙布の分布」（萩博物館調査研究報告第一八号）では市町村史誌の記述を中心に、萩地域及び山口県内における裂織及び紙布などの織布の分布調査結果を報告した。裂織は阿武郡域のほか、玖珂郡域で用いられていた記述があり、当館が所蔵する三点のほか、県下では吉敷郡域において一点の資料が残存していることが確認された。ただし、紙布については阿武郡域、玖珂郡域における記述を見出すに留まり、山口県内に残存する資料に辿り着いていない。残存している資料数は少ないものの、二種の織布が山口県内の限られた地域でのみ用いられた、地域性のみられる織布であることが確認された。

本稿では、前稿に続いて裂織や紙布などの地域性のみられる衣料に関して、近隣地域である島根県石見地域における市町村史誌の記述を整理し、資料調査において対象地域で確認された仕事着資料の情報を付加し、その分布状況を報告する。なお、本稿に記載する分布図は後述する市町村史誌の記述を基に、当館で実施した資料調査において裂織の仕事着が確認された地域、並びに『日本民俗地図Ⅷ―衣生活―』（昭和五十八年刊）に生産・使用を確認できる地域を反映して作成した。また、分布図には平成十六年（二〇〇四）以前の自治体区分を用いている。

### 一 調査地域

島根県は日本海沿岸に細長く伸びた地域であり、かつての律令制に基づく三国に相当する県東部の出雲、西部の石見、沖合に浮かぶ隠岐の三地域に大別される。その中でも山口県に接する石見地域は江の川以東に旧邇

摩、邑智の二郡と大田、江津の二市、以西には旧那賀、旧美濃、鹿足の三郡、浜田、益田の二市によって構成される。かつてより石見地域は石州街道による交易など、萩地域をはじめ山口県との繋がり深い地域である。

なお、本稿では市町村史誌の記述を整理するため、江の川以東に位置する自治体を石見東部、以西の自治体を石見西部と区分する。

### 二 裂織

#### （一）市町村史誌等にみえる裂織

##### 《一》石見西部

『浜田市誌 下巻』（昭和四八年刊）によると、山村地帯では綴り織りの布でつくられたツヅリを、主として晩秋から春にかけての作業着として用いていたとされる。同市長見地区では鑪仕事に従事する人の衣服で、内平野部の農家では用いられていなかったとされる。また、普段着だけでなく晴れ着としても用いており、冬は暖かく、肌離れがよいため夏に着用しても暑くなかったとされる。棘が刺さっても破れにくく山仕事に重宝されたと伝えられている（浜田市誌編纂委員会編「きもの、など」『浜田市誌 下巻』三二九頁）。なお、ツヅリの製法については記載されていないが、仕事着の特徴から、綴り織りの布が木綿布を裂いたものを緯糸として用いた裂織であったことが推察される。なお、晴れ着として裂織の衣服を用いた事例は山口県内では確認されていない。

『旭町誌 中巻』（昭和六十年刊）にはツヅリについて詳しい記述がみられる。経糸には麻糸や木綿糸、または麻糸と木綿糸を交互にかけたもの、緯糸に着古した木綿衣類を五ミリ前後の幅に切り揃えた裂き布、または織り上がりの布よりも少し幅の広い布を五センチ程の一定の幅に切断したものをを用いたとされる。平常はかたそ織り（片羽）、厚地にする場合はもろそ

織り（丸羽）にしていたとされる。織り上がりの布幅は三〇〜三五センチほどで、これを一・八メートル内外に裁ったものを二つ用意し、縦に二つ折りにして前身頃、後身頃として用いたツヅリが多く仕立てられたとされる。後身頃は丈夫な糸で縫い合わせ、九センチほどの衿肩明きをとり、うまのりを残して両脇を縫い合わせた仕立てであったと記されている。丈は膝がしらよりもやや長いものが多く、袖は紺地の手織木綿布の筒袖で、袖付けを広くとつたものが多かったとされる。

ツヅリを着ると夏場は涼しく、冬は暖かったため、一年のうち着用する期間が長かったとされる。使用年代は町内でも異なっており、市街地では昭和初年頃まで着用していたが、農村部の各地では遅くまで着用しており、来尾地域では昭和四十四年にも着用していたとされる。

周辺集落で用いられた裂織の仕事着の特徴も記されている。県境を挟んで隣接する広島県芸北地域の人は背部中央に五本の横白線が入ったツヅリを着ており、山県郡芸北町（現北広島町）大暮・高野地域は黒地に白の横縞、同町才乙地域は白線を入れない無地織で、白線の入れ方によって居住地域が識別できたとされる。一方、石見地域ではこのような特徴はなく、自由な横縞を織っていたとされる（旭町教育委員会編「衣材料」『旭町誌 中巻』五〇三〜五〇五頁）。

『金城町誌 第五巻』（平成十四年刊）によると、ツヅリの経糸には麻糸や木綿糸、緯糸に木綿の古着を五〜六ミリ程度に細く切った裂き布を用いていたとされ、破れにくいため、特に山仕事で重宝されたと伝えられている。夏は涼しく、冬は暖かく、一年の中で着る期間は長かったとされる。ツヅリはほとんどの家で織られていたが、昭和十年頃には着られなくなつたようである（金城町史編纂委員会編「一 仕事着」『金城町誌 第五巻』三五七〜三五八頁）。なお、ツヅリの仕立て方については前述の『旭町誌

中巻』と同一の内容が記載されている。

## 《二》石見東部

『江津市誌 下巻』（昭和五十七年刊）によると、経糸に麻糸、緯糸に襦布を用いたツツレが山仕事に用いられたとされる。形状は主に袖無しで、雨をよく弾き、丈夫で荊いばらを通さない利点があったとされる（江津市誌編纂委員会編「服飾」『江津市誌 下巻』一一五八頁）。

『石見町誌 下巻』（昭和四十七年刊）によると、労働着として浅黄や渋染の木綿布、または襦襦布を緯糸に用いたツヅリを上着として着用していたとされる（石見町誌編纂委員会編『石見町誌 下巻』二〇四頁）。

『瑞穂町誌 第三集』（昭和五十一年刊）では、防寒用として、用布を裂織にしたツヅリなど寒風を通さない厚手の仕事着を用いていたとされる（瑞穂町文化財専門委員会編「衣（きるもの）」『瑞穂町誌 第三集』六三七頁）。

『川本町誌』（昭和五十二年刊）では、経糸に麻糸、緯糸に撚った襦襦布を用いたツツレを仕立てていたとされる。雨を弾き、荊にも強く、色々なところで用いられたとされ、形状は主にソデナシであったとされる（川本町誌編纂委員会編「衣」『川本町誌』一二四五頁）。

『羽須美村誌 下巻』（昭和六十三年刊）によると、経糸を麻糸、緯糸を細かく裂いた襦襦布で仕立てたツツレは、厚く丈夫で、貴重な仕事着として山仕事に用いられていたとされる（羽須美村誌編集委員会編「衣生活」『羽須美村誌 下巻』八五二頁）。

『大和村誌 下巻』（昭和五十六年刊）によると、古布を引き裂いて織つたツヅリと呼ばれる袖無しの衣服があったとされるが、その用途については記されていない（大和村史編纂委員会編「衣・食・住」『大和村誌 下

(二) 裂織の分布状況

島根県西部の石見地域における裂織の分布図(図1)を作成した。石見地域では広範囲に渡り裂織の仕事着が分布していることが読み取れる。また、沿岸部に比べ、山間部に集中した分布を見出すことができる。

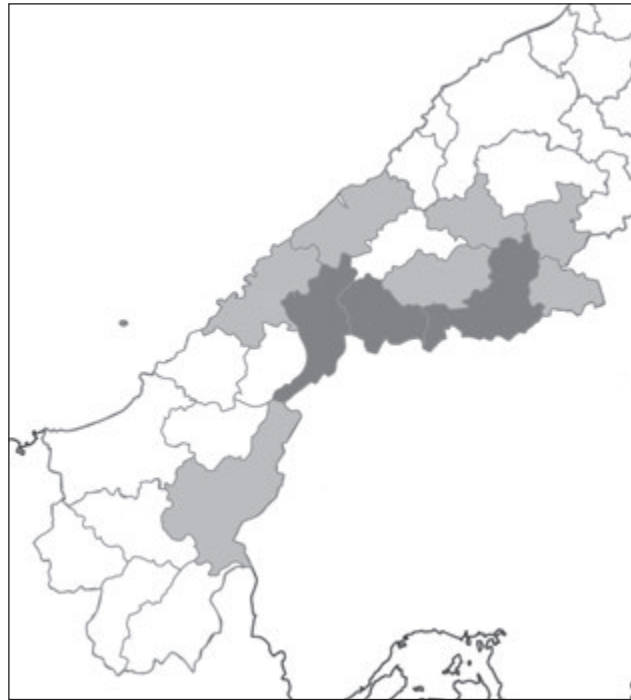


図1 島根県石見地域における裂織の分布図

作図：山田愛子(萩博物館)

石見西部地域の中で山口県に隣接する益田市、美濃郡美都町・匹見町(現益田市)、鹿足郡津和野町・日原町(現津和野町)、鹿足郡六日市町・柿木村(現吉賀町)の市町村史誌には裂織の記述は見出せていない。『匹見町の民俗』(昭和四十一年刊)にツヅレと呼ばれる防寒用または山樵用の仕事着に関する記述を確認できるが、縞や緋の古布を継ぎ合わせて作られていたものであり、裂織とは異なる衣服を指していることが考えられる(矢

富熊一郎「着衣」『匹見町の民俗』四頁)。また、石見東部地域の市町村史誌では、裂織の仕事着に関する仕立て方や用途などの記述が少なく、地域毎の差異は見出しにくい。

那賀郡金城町(現浜田市)で収集された農具や紙漉き道具などの民俗資料七八点が国指定有形民俗文化財『波佐の山村生産用具』として指定されており、指定資料の中にツヅリやツヅリオビなどの仕事着を確認することができ、指定外資料にも裂織を用いたツヅレブトンが残存している。また、那賀郡旭町(現浜田市)、邑智郡瑞穂町(現同郡邑南町)においてもコシギリやソデナシなど、裂織の仕事着資料が残存していることが確認された。いずれの資料も当該各地域の民俗資料館等に収蔵されている。

三 紙布

(一) 市町村史誌にみえる紙布

《一》石見西部

『日原町史 下巻』(昭和三十九年刊)によると、紙布をイゴギと呼び、コシギリ(上衣)やサルマタ(下衣)を仕立て、山仕事に用いたとされる。紙布は荊に引つかからない特徴があったとされる。また、紙布を布団の材料としても用いたが、冷たくて重いものであったようである。紙布に用いる楮紙はノノガミ(布紙)と呼ばれ、少し厚い良質なものであったとされる(沖本常吉「衣服」『日原町史 下巻』九四二〜九四五)。

『柿木村誌 第一巻』(昭和六十一年刊)によると、木綿以外の衣料として楮の繊維を用いたカミツムギと呼ばれる衣服があったとされる(柿木村誌編集委員会編「仕事の服装」『柿木村誌 第一巻』六九九頁)。

『六日市町史 第二巻』(昭和六十三年刊)によると、イゴギ(紙布)のコシギリ(腰切り)を山仕事や炭焼きの仕事着として用いていたとされ

る。コシキリは膝丈ほどの長さで、袖は筒袖、鉄砲袖、巻袖であったとされるが、袖地の材質は記されていない。紙布を織る際には布紙と呼ばれる少し厚手の良質な大型紙を用いたとされる（六日市町編「衣服」『六日市町史 第二巻』八四六～八四八頁）。

『美都町史』（昭和四十三年刊）によると、紙布で仕立てた仕事着があり、丈夫であったため農家では大正頃まで着用していたとされる（鈴政信市「一〇・時代と生活風習」『美都町史』六五九頁）。

『浜田市誌 下巻』によると、石見半紙をコヨリ（紙縫り）にしたものを経糸、緯糸に用いた織布を紙布またはカミコと呼んだとされる。紙布には経糸に麻糸を用いたものもあったと伝えられている。紙布でコデナシと呼ばれる膝丈の仕事着を仕立て、紙布のマエダレとともに用いたとされる。紙布は何度洗濯しても痛むことがなかったが、肌触りが悪く、濡れると皮膚を強く刺激するため、明治以降は木綿の肌着の上から着るようになったという。麦を取り入れる際に芒がつかない利点があり、農村ではどこでも用いられていたが、大正初年には着用されなくなったとされる。着られなくなったものはフトンの芯、ブト（ブユ）を除けるイブシの芯として用いられたとされる（浜田市誌編纂委員会編「きもの、など」『浜田市誌 下巻』三二〇・三二九頁）。

『旭町誌 中巻』によると、経糸、緯糸ともに紙糸で織った紙布をカミノノと呼んだとされる。紙布に用いる和紙には三椏を混ぜてはならず、楮のみを原料としていたとされる。また、経糸に麻糸を用いた紙布はなかったと伝えられている。膝丈の仕事着をコシギリ、ミジカと呼んだが、紙布製のものコダナシ（コデナシともいう）と呼んだとされる。かつては肌に直接着ていたが、明治末年以降は木綿襦袢の上から着用するようになったという。紙布を用いたユキバカマと呼ばれる下衣も仕立てられたほか、豆

腐製造用のしぼり袋や穀類を入れる袋にも紙布用いられたとされる。大正十年頃から織る人が少なくなり、昭和初年頃までは農村各戸に何枚もコダナシを所有していたが、時代が下がると米や麦の脱穀時にのみ着られるようになったとされる（旭町教育委員会編「衣材料」『旭町誌 中巻』四九〇～四九一、四九六、五〇二頁）。

『金城町誌 第五巻』によると、紙布をカミノノと呼び、上衣のコデナシや下衣のユキバカマに用いたとされる。紙布製のコデナシは男女の常用作業衣として明治末期まで用いられたが、ユキバカマは明治末期には木綿布製のものに替わっていたとされる（金城町誌編纂委員会編「一 仕事着」『金城町誌 第五巻』三五六～三五七頁）。

このほか、『匹見町の民俗』によると、匹見町ではイゴキ（紙布）のコシギリを用いていたとされる。紙布製の仕事着を一年で破れるほど多用し、毎年仕立てていたとされる（矢富熊一郎「着衣」『匹見町の民俗』四、一〇頁）。

## 《二》石見東部

『江津市誌 下巻』によると、紙布をコデナシ、またはコダナシと呼び、紙布製の仕事着のこともコデナシと呼ぶようになったとされる。山仕事や畑仕事に用いられたとされる（江津市誌編纂委員会編「服飾」『江津市誌 下巻』一一五八頁）。

『桜江町誌 下巻』（昭和四十八年刊）によると、大正初期までコデナシ、またはコダナシと呼ばれる紙布の仕事着を用いていたとされる（桜江町誌編纂委員会編「衣生活」『桜江町誌 下巻』四二七頁）。

『石見町誌 下巻』にも、仕事着として紙衣を用いていたとされる（石見町誌編纂委員会編「衣食住の状態」『石見町誌 下巻』二〇四頁）。



『川本町誌』によると、紙布は天領を除く石見地域一帯で用いられていたとされる。隣接する桜江町鹿賀（現江津市）が和紙の産地であり、原料の楮と交換することで和紙を得ることができたため、同町川本地区、川内地区でも紙布を用いていたとされる。紙布の仕事着は荊の中でも傷むことなく、重宝したとされる（川本町誌編纂委員会編「衣」『川本町誌』一二四五頁）。

『邑智町誌 下巻』（昭和五十三年刊）には、紙布で仕立てた衣服が用いられていたとされるが、その用途や型式には触れられていない（邑智町企画課編「服飾」『邑智町誌 下巻』六八一頁）。

#### （二）紙布の分布状況

石見地域における紙布の分布図（図2）は次のとおりで、石見地域西部を中心に広く分布している。分布地は藩政時代から和紙やその原料となる楮の栽培が行われた地域である。前稿で述べたとおり、紙布が紙漉きという産業に依拠して生産されたという地域的な特色を表していることを読み取れる。山口県と比較すると、紙布の生産工程についても詳細な記録がなされている地域があり、仕事着をはじめとする紙布を用いた資料も多く残存している。

那賀郡金城町には前述の国指定有形民俗文化財『波佐の山村生産用具』として紙布や関連する生産用具も指定されている。また、鹿足郡日原町（現津和野町）では紙布製の上衣、那賀郡三隅町（現浜田市）では反物や紙布製のシャツ、那賀郡旭町においては豆腐製造に用いる紙布製のしぼり袋といった衣類以外の資料も確認された。

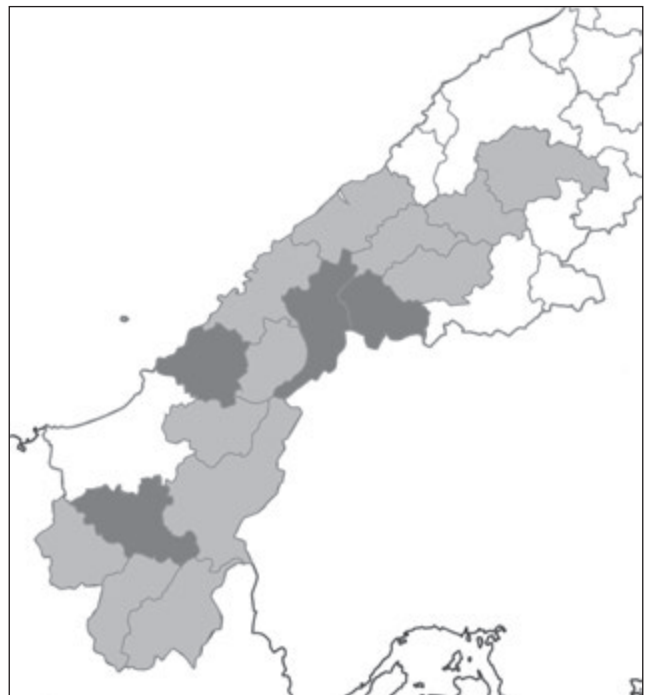


図2 島根県石見地域における紙布の分布図  
作図：山田愛子(萩博物館)

#### 四 藤布

##### （一）市町村史誌にみえる藤布

##### 《一》石見西部

『旭町誌 中巻』によると、当地の伝承では藤布で仕立てたコシキリやミジカと呼ばれる仕事着があったとされる（旭町教育委員会編「衣材料」『旭町誌 中巻』四九六頁）。

市町村市誌のほかでは、『匹見町の民俗』に藤布の記述がみられる。各戸で自家用に藤を用いた着物を織ったとされる。当地では明治三〇年ころには製法技術が失われたとされる（矢富熊一郎「着衣」『匹見町の民俗』六七頁）。

## 《二》石見東部

『邑智郡誌』（昭和十二年刊）によると、明治末年まで藤葛を糸にしたフジッコ（藤こそ）と呼ばれる織布を生産していたとされる。耐久力があり、仕事着として理想的であったが、木綿織物よりも製織に係る費用が高く、労力もかかることから姿を消したとされる（森脇太一編「衣服」『邑智郡誌』五八四頁）。

『江津市誌 下巻』によると、大正の初めころまで、麻の経糸と、藤の繊維を用いた仕事着を用いていたとされる（江津市誌編纂委員会編「服飾」『江津市誌 下巻』一一五八頁）。

『桜江町誌 下巻』によると、大正初期まで麻の経糸と、藤の繊維で織った仕事着があったとされる。紙布のコーデナシと並行して用いられていたと伝えられている（桜江町誌編さん委員会編「衣生活」『桜江町誌 下巻』四二七頁）。

『川本町誌』では、当地域で藤布が織られていたと記憶する人が同町内におり、藤布は紙布、麻布などと同様に仕事着として用いられていたとされる（川本町誌編纂委員会編「衣」『川本町誌』一二四五頁）。

### （二）藤布の分布状況

島根県石見地域における藤布の分布図（図3）は次のとおり。前述した二種の織布に比べると、藤布に関する市町村史誌の記述は少なく、原料となる藤についても、どのような種類であったのか判別することが困難である。分布地もまばらであり、資料調査においても現存する藤布資料を確認することはできなかった。



図3 島根県石見地域における藤布の分布図  
作図：山田愛子(萩博物館)

### 五 おわりに

本稿では島根県西部の石見地域における裂織と紙布を中心に、藤布についても言及した。前稿に引き続き調査箇所は限定的なものであり、今後の調査によって調査地域においても仕事着等の資料が新たに確認される可能性があるものと考えられる。

なお、資料調査では島根県東部においても裂織の仕事着資料や、現存する藤布資料などを確認している。本稿では石見地域のみを対象としたが、今後は島根県全域における市町村史誌の記述を整理し、分布図とともに報告する。

〈引用参考資料〉

- 旭町教育委員会編 一九八五「衣材料」『旭町誌 中巻』旭町、四九〇～  
四九一、四九六、五〇二～五〇五頁
- 石見町誌編纂委員会編 一九七二「衣食住の状態」『石見町誌 下巻』、  
二〇四頁
- 小笠原光幸 一九七八「服飾」邑智町企画課編『邑智町誌 下巻』邑智  
町、六八一頁
- 沖本常吉 一九六四「衣服」『日原町史 下巻』日原町教育委員会、九四二  
～九四四頁
- 金城町誌編纂委員会編 二〇〇二「仕事着」『金城町誌 第五巻』金城  
町、三五四～三五八頁
- 江津市誌編纂委員会編 一九八二「服飾」『江津市誌 下巻』江津市、  
一一五八頁
- 酒井董美 一九八六「仕事の服装」柿木村誌編纂委員会編『柿木村誌 第  
一卷』柿木村、六九九頁
- 鈴政信市編 一九六八「二〇・時代と生活風習」『美都町史』美都町史編さ  
ん委員会、六五八～六五九頁
- 田桑正喜 一九八八「衣生活」羽須美村誌編集委員会『羽須美村誌 下  
巻』羽須美村、八五二頁
- 浜田市誌編纂委員会編 一九七三「きもの、など」『浜田市誌 下巻』浜田  
市、三二九頁
- 文化庁編 一九八二『日本民俗地図Ⅷ―衣生活―』国土地理協会、二・〇〇  
頁
- 三浦福雄 一九八一「衣・食・住」大和村誌編纂委員会編『大和村誌（下  
巻）』大和村教育委員会、六三六頁
- 三宅正雄 一九七六「衣（きるもの）」瑞穂町文化財専門委員編『瑞穂町誌  
第三集』瑞穂町教育委員会、〇〇頁
- 六日市町編 一九八八「衣服」『六日市町史 第二巻』六日市町教育委員  
会、八四六～八四八頁
- 森脇太一編 一九三七「衣服」『邑智郡誌』、五八四頁
- 森脇太一 一九七三「衣生活」桜江町誌編さん委員会編『桜江町誌 下  
巻』桜江町、四二七頁
- 森脇太一 一九七七「衣」川本町誌編纂委員会編『川本町誌歴史篇』川本  
町教育委員会、一二四五頁
- 矢富熊一郎 一九六六「着衣」『匹見町の民俗』匹見町役場、四～一〇頁

※まつお ゆうへい 萩博物館学芸員